

開倫塾

塾長 林 明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も開倫塾の時間をお聴き頂きありがとうございます。何回か前に本を少しずつご紹介するということをお話しました。今日は少し珍しい本を1冊ご紹介させて頂きたいと思います。「大学の使命」という本で、オルティカ・イガセット、「大衆の反逆」という大変有名な本を書かれたスペインの哲学者が書いた本です。玉川大学の出版部から出されています。この本を読んで考えたことを少しお話させて頂きます。この本は1920年代に書かれ、最大の課題は今は違うでしょうが、だらしなさ、ぞんざいさ。上から下まで私達国民生活にすっかり染み込んでいて、常にその生活行動を引っ張り、誘い込んでいると、これがその当時のスペインの病気の根っ子であると、あらゆる事がそこから起こり、表れていると。病根の先端を探ると、ただ一言表現できる事実はだらしなさ、ぞんざいさ、上から下まで国民生活の内になんか染み込んでいて、その生活行動が引っ張り込んで誘い込んでいる。そうしたらだらしなさであると。本の最後に書いています。「だらしない」というのは、取扱の難しい仕事をするにも国の人、民間の人がするについても、礼儀作法、自尊心、品位も全部欠如していると、そこまで批判なさっています。では、どのようにだらしなさが起こるかということ、だらしなさというのは現れ出すとそれに慣れてますます増強していく。だらしなさとは、それが自分を心地よく楽しませるのでもっと拡大して永続させる方向に傾いていく。こうした傾向が当時のスペインのあらゆる所に浸透している。上は国家のその公務から、下は家族生活、さらには個々人のきどった顔つきにまで。この方は大学の先生なので、大学の教授会の雰囲気までこのだらしなさでうとうしい。通常の日々でさえ、その辺の廊下を通るのにも学生の大騒ぎの声を聞かされ、大ざっぱな手振り、身振りなどを見せられるにつけ、だらしなさ、ぞんざいさで息苦しいほど濁った空気で息をしている。そんなことを問題提起しています。どうしたら、だらしなさが克服できるかといいますと、好調である。非常に調子が良いという状態が必要です。普通、気まま、しまりのなさ、だらしなさ、ぞんざいさという状態から脱却して調子がいい。見た目がすがすがしいという状態にはなかなかならない。ではどうしたらよいかということ、自ら鍛錬して、鍛錬し続ける。これ以外の方法はないとオルティガという先生は言っています。この本は今から80年程前に書かれましたが、今の日本を見ると参考になるお話です。私もだらしがいい人ではないですが、国内でもこの方が80年前に書かれたようなことが起こっているのではないかと。特に学校の生徒ですね。だらしない服装。一番いけないのはだらしな系というものを皆さんが認めてしまったことです。高校生の服装を見てだらしないと思わない方はいないと思います。これを学校で昔はかなりきつく指

導しましたが、現在の学校ではかなり自由にしています。高校生の化粧などです。ただこれでいいのでしょうか。

私は東京都の中学校で何回かお話させて頂きましたが、とにかく私が話す前から寝ている人がいる。タレパンダのように机にうつぶせになっている。このような状態を先生方も注意しますが、なかなか直せない。ありとあらゆる所がたせられない。これが今の教育の一番の問題だと思います。それに対する答えは学生、生徒が自らを鍛錬し、鍛錬し続けることだと思います。どのように鍛錬したらよいかというと、勉強の場での鍛錬は教室での礼儀作法です。先生の方を向いてきちんと話を聞く。あごを引いて姿勢を正す。忘れ物をしない。開倫塾にはあまりいませんが、一般の教育機関や学校には忘れ物をする人がたくさんいます。忘れ物をするとう勝負にはなりません。先生がいくら教えようとしても教科書やノート、鉛筆などがなくては授業、勉強にはなりません。これもだらしがないということです。ですから、自らを鍛錬し、鍛錬し続ける。教える方もだらしがないと思ったら、色々な方法でそれを直すように注意する。生徒が鍛錬し続けることを助ける。それが教育者、家庭、地域社会の仕事であり、鍛錬であると思います。

今の教育の最大の課題はだらしなさ、ぞんざいさであると、このオルティガ、イガセットというスペインの哲学者が 80 年前に書いた「大学の使命」という本を読んで感じましたが、皆さんはどうお感じでしょうか。是非、この事をお考えになり周りにお子さん、学校でだらしがない状況が退却できるように鍛錬すること、鍛錬し続けることを支援して頂きたいと思います。